2025年4月26日

人権ネットワークノ八幡　NEWS

事務局　〒523－0857 近江八幡市八幡町170(旧八幡教育集会所内)
電話　【携帯】　080－2525－7114(高坂)
【メール】 Tko.koj1224@yahoo.co.jp

東京・大久保にあるアイヌ料理店「ハルコロ」の店主、宇佐照代さん主演の映画が全国で上映されている。照代さんが舞台挨拶に来る３月１６日に京都シネマへ行くと、映画にも出てくる武佐小学校の山本利恵子さんはじめ、ふだん「参代芽」（近江八幡市内の居酒屋）で見慣れた人たちが多く訪れていた。

照代さんは幼いころからアイヌの伝統舞踊などを披露するイベントに祖母や母とともに参加していたが、それほど思い入れがあったわけではない。そんな照代さんが、変わったのは祖母ハツエさんの病床でのひとことだった。そしてその思いは、口承で娘のルイノさんに引き継がれていく。写真家の宇井さん、在日の黄（ファン）さん、自称「縄文人」の平田さんたちが、アイヌに魅せられた思いを語り、照代さんの人となりが鮮明に描かれている。

私は、本紙ライターTKさんから紹介してもらった元祖アイヌ料理店「レラチセ」（早稲田）、その後、中野に移った「レラチセ」、そして「ハルコロ」の常連客？として渡り歩いてきた。周年イベントでは伊藤満明さんと漫才コンビ「チポロペッ」として出演したことも何度かある。５人の子どもを連れて釧路から東京に出てきた照代さんの母タミエさん（柳瀬ブルースを作曲した宇佐英雄さんの妹）とは、いつも生ビールで乾杯した思い出がよみがえる。

みなさん、東京を訪れた際には、ハルコロの料理人で照代さんの連れ合いHIROさんのアイヌ料理をご賞味あれ。

（清原勝）

読書の林

『谷から来た女』　桜木紫乃　著　(文藝春秋)
2024年文藝春秋社　￥1,700+税

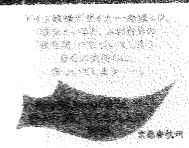
物語の主人公は、アイヌ文様デザイナーの赤城ミワ。彼女の生まれ育った谷は、国の政策で巨大ダムが建設される計画が起ち上がった。

この谷は、アイヌの先祖代々の人たちが聖地として大切にしてきた所であり、ミワの祖父たちが国を相手に裁判をおこすが、残念ながら敗訴になりコタン(村)はダム湖の底に消えていくのである。

私は20数年前この地を訪れ、物語ではミワの父にあたる貝澤さんから話を聞くことができた。さて、小説の中ではミワにかかわる人々が織りなす小編が収められている。

その一つが、ＴＶ会社に勤める健太郎がドキュメント番組を作る為、ミワに取材した時の一言が印象的である。彼がミワに取材を受けた理由を問うたところ、

「谷に生まれたことを公表している人間の義務だからです。
出自を隠して生きなくてはいけない人が、一人でも減るよう祈りながらやっています。
私は民族の代表でもなんでもないし…」。



（ＴＫ）

お知らせ　5月10日(土) 11:00

今年度の総会を、上記日程で開催予定です。会場は、事務局（旧・八幡教育集会所）です。

１１：００～１２：００　総会
１２：３０～　交流会（会費　２，０００円程度）

例年通り、緩やかに楽しくおしゃべりをと考えています。ただ、重要案件が1件あります。それは、2年後に教育集会所が閉鎖され、私たちの活動拠点が失われるかも…という大きな問題です。
多くの方の知恵＝アイディアが必要です、ぜひご参加ください。

読書の草原

「ゴールデンカムイ／絵から学ぶアイヌ文化」
中川裕著　集英社刊　1500円＋税

野田サトルさんの人気漫画「ゴールデンカムイ」。その作品のアイヌ語監修を務めた千葉大学名誉教授の中川裕さんが漫画の場面をテキストにアイヌ民族の文化を解説した本が昨年２月に刊行されました。私もようやく手に入れたのでここで紹介をします。

「アイヌの精神文化」「アイヌの一年」等全８章からなり、本当に詳しくアイヌ文化を解説しています。登場人物達が囲炉裏を囲んで談笑している場面でも、アイヌの人々の作法に則って順に座っており、漫画だからと適当に描いている訳では無い事が分かります。後半には樺太アイヌの事も詳しく紹介されています。もちろんどこから読んでもＯＫです。

５００頁を超える大冊ですが、漫画の画面頁も多くサクサクと読めます。作品の方は劇場版実写映画が公開され、続きがＴＶ放映されましたが、それを受けて劇場版映画第２弾が準備中とか。ゴールデンカムイ発のアイヌブームはまだまだ続きそうですね。この本を読んで事前学習をしておきましょう！

（水来亭平助）

マリアナさんの日記

「差別の形」

小さい頃（日本へやってくる前）に父親から「差別されないように日本の人の言うことをきくこと」と教育されてきた。父親の言う通りにしていても「差別」をたくさん受けてきた。

最初（子どものとき）は、「見た目」「言葉」「文化」母親の存在」などだった。日本語ができるようになってから「発音」で差別されるようになり、大人になってから「できる」ということで差別されるようになった。

最初は差別を受けることがいやでたまらなかった自分も、いつの間にか「観察」するように、今では「おもろいな、ここで差別するのか」と楽しめるようにまでなった。

＜白鳥川の桜＞

「マイクロアグレッション」（＊）はありますか？と何のためらいもなく聞いてくる人には、さすがに驚いた。そして、次世代の子どもにまで「差別」がうつっていくのである。そしてきっとまたその次…その次…。

人間は本当に複雑でいやな生き物やなーと思いつつ、「差別」とこれからも付き合っていくしかないなぁ、と思っているこの頃である。せめて次世代には、ゆるやかな差別であってほしいなぁと、わけのわからないことを考えている今日。

桜が咲きそうや。

＊マイクロアグレッション＝別名「小さな（マイクロ）攻撃性（アグレッション）」という。人と関わるとき、相手を差別したり、傷つけたりする意図はないのに、相手の心にちょっとした影をおとすような言動や行動をしてしまうことだ。「微細な攻撃」とも訳されるマイクロアグレッションがなぜ相手を傷つけるかというと、その言葉や行動には人種や文化背景、性別、障害、価値観など、自分と異なる人に対する無意識の偏見や無理解、差別心が含まれているからだ。（IdeasForGoodのページより）